

「出エジプト」

2014年05月15日

「出エジプト」はイスラエル人にとって奴隷解放という救いの出来事であった。ペトロにしろ、パウロにしろ、彼らは演説をする時、信仰の父・アブラハムから話し始めるが、モーセによる「出エジプト」に入ると一層の力を込めて話す。神の恵みを体験したイスラエル人の原点だからである。

私は初めて『出エジプト記』を読んだ時、民族の壮大な脱出劇に魅せられた。「出エジプト」は紀元前1280年に起こったとされている。文字や口伝で伝承され、私たちが読んでいる形に整えられていったのであろう。しかし反面、『出エジプト記』の記述は出来過ぎではないかという疑念が抜け切れない。私は「出エジプト」の民族の脱出劇は、書かれた通りの歴史的事実ではないのではないかと思っている

色々な疑問がある。モーセと兄・アロンが、エジプト王・ファラオに「三日の道のりを荒れ野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください」と要求している。ファラオはピラミットを造ることができるほどの強大な権力者である。一方のモーセとアロンはただの奴隷である。この両者が対等の対話ができるはずがない。即刻、殺すこともできたであろう。諸々の民族主義的な疑問点をあげれば切りがない。

イスラエル人はバビロン捕囚と解放を体験した。これは、生身で味わった実体験で、奴隷の屈辱と解放の喜びであった。この体験が旧約聖書の骨格になっている。彼らは、バビロン捕囚と解放に重ね合わせ、「出エジプト」という壮大な物語として描き出したのではないか。歴史的事実は、エジプトから少人数の奴隷の苦難の脱出があった。この事実を踏まえて、『出エジプト記』を神話的、寓話的に創作したと理解すれば、筋道が通る。

しかしである。『出エジプト記』が人類の歴史において、差別、抑圧されてきた民族、人々にどれほど大きな力と希望を与えてきたか。『出エジプト記』は圧倒的に支持され、読み続けられてきた。このことの意味は大きい。

聖書を書き残したイスラエル人は神話的、寓話的な記述に深いメッセージを込めて著すことを常識とした。抽象的な概念でなくで、具体的な出来事（神話、寓話）を通して、人間の生と死、歴史を捉えたのである。私たち現代人は理性と整合性に反するものは否定しがちであるが、それが、自分の心を、また文化を貧しくしているのではないか。

私は「出エジプト」の記述は歴史的事実ではないと思っているが、『出エジプト記』に限りない喜びと勇気を与えられている。記述の背後にあるメッセージを受け止めていくのが、聖書を読むということであろう。